

0.3°C/20年という気温上昇は、期間を10倍に延長すると3°C/200年となる。地球の気温は6000年前の高温期以来、上下の変動をくりかえしながら、3°C程度低下した(Imbrie & Imbrie, 1979)。ところが最近の気温上昇は200年で3°Cであるから、自然現象に比較し、1桁大きな変化とみななければならない。

最近のこのような著しい昇温の原因として、人為的なCO₂やGG(温室効果ガス)の増加による温室効果の増大が多くの人達によって考えられているのである。

理論的に完全に説明しつくされてしまったとは言い難いが、現象論としてなら、現在、地球は次の氷期に向っているのだが、その途中でおそらく人為的に気温が著しく上昇させられており、その結果、様々な気象異常が各地で起こっているように思われる。

A, B両著を読んでくれるなら了解されると思うが、BにはA出版後の諸事実がつけ加えられているとしても、内容的に大きな矛盾はないのである。両著の表題は時間の桁がちがっているのである。ただここで反省すべきは、変化の桁を必ずしも明示しなかったがゆえに、事実としては、はっきりしていても、情報として誤り伝えられたかもしれぬことである。

この点の主な責任は情報の流し手の側にあるが、本を正確に読み取ろうとせず、表題だけで、手取り早く判断しようとした読者の側にも幾分か責任のあることはやむをえないことかもしれない。

本を書くことは、人にこれが読まれることを前提とする。そのため表題などに幾分の誇張のゆるさされることは内外の多くの本をよまれた方なら熟知されることであろう。これはカレンダーにヌード写真をつけたものがあるのと同様で、とにかく読んでもらわなくては出版は成立

しない。科学書だって、この例外ではない。

私の経験を語るなら、Aの表題は出版者の強い要請に私が妥協した結果である。Aを読まればわかるように、その内容の半分以上は気候変動とは関係のないことが語られているのであって、表題は必ずしも内容を表現していない。客よせの手段として、私は妥協したので、それが思わしくないといわれるのなら、私は引き下るはかない。

質問者が“長期予報的なものにまで、流行があるのでしょうか?”と言われるその意味が私にはよく飲みこめないが、最近、憂慮されている大切な問題は、長期予報が肝腎のときに、さっぱり当らなくなっていることである。予想が実況と全く反対になっていることも少なくない。地球の気象の未来について、本当に考えてみようというのなら、長期予報が現在かくも当らなくなった理由を問うことの方が先ではないか。しかもなお寒冷化か温暖化にこだわるなら、温室効果による予測がわずか1年で、およそ半分位まで縮小してしまったのはなぜか、を問うことの方が、より一そう重要ではないだろうか。

参考文献

- Berger, A., 1981: The Astronomical Theory of Paleoclimates. Climatic Variations and Variability: Facts and Theories. Berger, A., 編, Reidel Pub, P. 501-525. 図はこの論文中の第3図を引用した。
- Imbrie J. and K.P. Imbrie, 1979: Ice Ages, solving the mystery およそ6000年前からの気温の低下は、この本のP179の第43図に明瞭に示されている。小泉格氏の邦訳「氷河時代の謎をとく」(1982, 岩波現代選書25)には、P244にこの図がある (根本順吉)

気象研究ノート第170号

気象災害—気象学会員への注文

(1990年7月)

目次

1. 強風災害
2. 豪雨災害防災のために必要とされている分野
3. 土砂災害の視点から
4. 航空事故と気象現象
5. グラフで見る気象災害

伊藤 学, 米谷恒春, 木下武雄, 大八木規夫
加藤喜美夫, 湯本幸治

配布価格 通常会員 1,170円 定期購読会員 870円
団体会員 1,470円 会員外 1,640円